

平成 26 年度第 2 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要

1. 日時 平成 27 年 2 月 24 日(火)13 時 30 分～16 時 30 分

2. 場所 メルパルク東京「薔薇」

3. 出席者(敬称略)

座長	小佐古 敏莊	東京大学大学院工学系研究科原子力専攻教授
委員	五十嵐 康人	気象庁気象研究所環境・応用気象研究部第 4 研究室長
	生田 美抄夫	島根県原子力安全対策課原子力環境センター専門研究員
	小田 啓二	神戸大学大学院海事科学研究科教授
	兼保 直樹	独立行政法人産業技術総合研究所 環境管理技術研究部門 大気環境評価研究グループ主任研究員
	滝 光成	独立行政法人日本原子力研究開発機構 原子力科学研究所放射線管理部 環境放射線管理課課長代理
	田中 敦	独立行政法人国立環境研究所環境計測研究センター 同位体・無機計測研究室主任研究員
環境省	是澤 裕二	水・大気環境局大気環境課長
	伊藤 隆晃	水・大気環境局大気環境課課長補佐
	佐藤 正人	水・大気環境局大気環境課課長補佐
	森田 重光	大臣官房廃棄物・リサイクル対策部廃棄物対策課課長補佐

事務局 公益財団法人 日本分析センター
上原 哲、森本 隆夫、磯貝 啓介、太田 裕二、
伴場 滋、新田 済、佐野 友一、式見 純一

オブザーバー 日立アロカメディカル株式会社
三上 章、島元 武志

4. 議題

- (1) 空間 γ 線線量率及び大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度の解析結果について
- (2) 環境試料中の核種分析結果について
- (3) 平成 26 年度大気中における放射性物質の常時監視結果について(案)

5. 資料

- 資料 1 平成 26 年度第 1 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要
資料 2-1 空間 γ 線線量率及び大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度の解析結果について
資料 2-2 自動測定装置が更新されて 3 年を経過した測定所の対応基準値について

資料 3 環境試料中の核種分析結果について

資料 4 平成 26 年度大気中における放射性物質の常時監視結果について(案)

6. 内容

主な審議内容を以下に示す。

(1) 平成 26 年度第 1 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要について
事務局より、資料 1 に基づき、平成 26 年度第 1 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要について説明があった。

(2) 空間 γ 線線量率及び大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度の解析結果について
事務局より、資料 2-1、2-2 に基づき、空間 γ 線線量率及び大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度の解析結果について説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見を以下に示す。

- ・ 水準調査に関して、最大値を超えた時間の後方流跡線解析のみではなく、前後のデータ・空間的なデータなどほかの要因を考慮すると良いのではないかとの意見があった。また、後方流跡線解析に関して、地表面の高さの解析は正確性に欠ける場合があるので、参考程度に留めておくのが良いのではないかとの意見があった。事務局より、水準調査は線量率のみのデータしか存在せず、離島モニタリングに比べて周囲の要因を調査しにくいとのコメントがあった。
- ・ 過去の最大値の超過についてどの程度超えていたら超過と判断しているのかとの質問があった。事務局より、僅かでも超えた場合には超過と判断すると回答があった。
- ・ 水準調査に関して、自治体の意見を聞くことはできるのかとの質問があった。事務局より、自治体に問い合わせることはしていないとの回答があった。
- ・ 水準調査に関して、自治体担当者が代わっても、分析技術が担保できるように全体の底上げを図っていくことが重要であるとの意見があった。
- ・ 離島モニタリングの観測所の周辺環境について、よく把握しておく参考になるのではないかとの意見があった。
- ・ 来年度以降、調査地点が増えることに関して、専用のソフトウェアがあると役に立つのではないかとの質問があった。事務局より、来年度以降プログラム作成を検討しているとの回答があった。
- ・ 線量の傾向が変わった理由が判明している場合には、明記するようにすると分かりやすいとの意見があった。

(3) 環境試料中の核種分析結果について

事務局より、資料 3 に基づき、環境試料中の核種分析結果について説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見を以下に示す。

- ・ 離島モニタリングに関して、放射能濃度は事故以前のレベルと同程度になったと考えてよいのかとの質問があった。事務局より、今回の結果から断言することはできないとの回答があった。
- ・ 事故の影響と常時監視は分けて考えた方がよいとの意見があった。
- ・ Be-7 を測定している意味は何かとの質問があった。委員及び事務局より、環境の変動の指標として取りまとめているとの回答があった。
- ・ Cs-137 の放射化学分析の分析結果は、Cs-134 と分離できているのかとの質問があった。事務局より、放射化学分析は Cs-137 と Cs-134 の分離はできないので注釈を入れるようにするとの回答があった。

- ・ 離島モニタリングの佐渡関岬測定所の平成26年度第2四半期の大気降下物のSr-90が高い測定結果を示したことに関して、安定Sr量との比を見てみてはどうかとの質問があった。事務局より、検討を行ったが事象を説明できるような結果は得られなかったとの回答があった。

(4) 平成26年度大気中における放射性物質の常時監視結果について(案)

事務局より、資料4に基づき平成26年度大気中における放射性物質の常時監視結果について説明があった。

主な意見を以下に示す。

- ・ 過去の調査結果との変動を言及する場合には、誤解を生じることがないように表現の方法を熟考すべきとの意見があった。
- ・ 離島モニタリングと水準調査という2つの異なった調査をまとめて発表することに関して、一般の人が見た時に分かりやすくするべきとの意見があった。
- ・ 離島モニタリングと水準調査では比較対象が異なる(過去3年間と事故前3年間)ので、両調査について過去3年間及び事故前3年間とそれぞれ比較するとどのような結果になるのかそのまま書いてはどうかとの意見があった。
- ・ 公表する文書に関して、評価検討会で決めるよりは行政側で判断するのがよいとの意見があった。

以上